

昭和40年代初め、九州の田舎町の中学生だった私の同級生には、さまざまな境遇の子がいた。Hちゃんが住んでいたのは、町はずれのどぶ川のほとりにある、棒切れを打ち付けたような窓と板張りの壁でできている、風が吹いたら倒れそうな二階建ての建物だったが、その家に数家族が暮らしていた。朽ち果てた外見は田舎町でもなかなか目立っていて、多少の侮蔑が混じった表現で大人たちがその家のことを話していた気がする。初めて遊びに行った時、真っ黒でぶかぶかした畳を見てどこに座ればいいんだろうと思ったのを覚えている。それほど衝撃だったのだろう。50年以上たっても、彼女がニコニコしながら「また来てね」といい、すぐには返事ができなかったことがチクリと胸をさす。

制服以外に着替えがない子やお風呂に入れないうちの子もいた。二年生になった時Kさんが私の所属するバレエ部に入ったが、後で思えば彼女もその一人だった。週に数回しか練習にはでてこない、制服も練習着も汚れていて、髪はいつもぼさぼさで、みんなと口は利かずすぐに家に帰ってしまうので、年頃の女の子たちの不満の的になっていっ

た。そしてある日、私は「善意」で彼女に忠告してあげようと思い、帰り際に「練習に毎日来てほしい。それに、お風呂に入ったほうがいいと思う」と言った。「なに？」と笑って私の話をきこうとしていた顔がひきつり、それ以降

プライド

澤 順子

(さわ じゅんこ)
東京都在住)

二度と練習に顔をだすことはなかった。「やめたらしいよ」と誰かが言った時、一瞬私のせいかなど思ったけどそんなことはすぐに忘れた。

東京の青学をでた若い英語教師が二年次のクラス担任だった。地方都市育ちの彼女は、絵に描いたように貧しい子どもたちがいることにひどく驚いたようで、家庭訪問のあと、「Mくんの家は戸の代わりに筵(むしろ)を下げていて、畳のない部屋で病気の

お母さんが寝ているんだ。そんな家があることをみんなは知っているか？」と涙ながらに話した。しかし当のMくんは語気を強めて「ばかにするな。おれはあんたに同情される理由はない」と抗議したのだった。担任は、あっけにと取られて、なぜ僕がこんなに心配していることが君には伝わらないんだろう、と唇を震わせていたが、生徒たちはただ、しらけた。

集団就職する子どもたちが「金の卵」と言われていた時代、KさんもMくんも中卒で就職した。M君は企業でマラソンをはじめ、頭角をあらわしたと人づてに聞いた。Kさんのその後は知らない。Hちゃんはその後引っ越して、小ぎれいな高校生になった。お風呂に入ったら？なんて無神経なことをいう私を卒業まで無視し続けたKさん、成績は最下位だが、自分の伝えたいことははっきりと誰にでも言葉で伝えていた賢いMくん。彼らのプライドが私にたくさんの事を気づかせてくれた。

現状を受け入れて、自分の環境を恥じることなく矜持をもって暮らしていたM君たちは、本当に見事な子どもたちだったと思う。私は情けない若い中学生だったけどね。